

『うつほ物語』 「若小君物語」 の和歌と物語

「歌物語」論のために

宮 谷 聡 美

一 「歌物語」とは―問題の所在

『うつほ物語』は十世紀後半に成立したと考えられる長編物語で、俊蔭から四代にわたる秘琴伝授を軸に、あて宮をめぐる求婚譚、そしてそれに続く立太子争いの話⁽¹⁾が組み合わせられた物語である。「若小君物語」とは、首卷「俊蔭」巻の中で、俊蔭漂流譚に続く部分、すなわち、両親と乳母に死に別れた俊蔭の娘が荒廃した邸で悲嘆に沈んでいる折、太政大臣家の四郎である若小君（のちの藤原兼雅）が偶然訪れて一夜を過ごすも、両親の監視が厳しいために、その後訪れることができなまま歳月が過ぎていく、俊蔭の娘と若小君の恋物語の部分と理解されている。

この部分は、十六首と『うつほ物語』の中では突出し

て和歌が多く、一般に「歌物語」的と認められてきた部分であり、近年では、「実忠物語」との関連が重視されるようになって⁽²⁾いる。

とはいえ、「歌物語」とは何か⁽³⁾についてはなお共通理解があるとは言いがたく、「景情一致」「抒情的」と一括りにされることも多い。

そこで、本稿では、「若小君物語」を三つの場面に分けて和歌と散文との関係を見ていくことによって、「歌物語」的と呼ばれる特徴にはいくつかのタイプがあることを確認したうえで、『うつほ物語』の表現の特徴の一端を明らかにしたい。

二 両親、乳母に死別した俊蔭娘

— 主人公の思いが和歌に収斂するもの

第一場面 両親、乳母に死別した俊蔭娘

世の中も知らぬ若き心地に、いとあはれに悲しく、春は花を眺め、秋は紅葉を眺めて明け暮らすに、ただ、この媼の食はすれば食ひ、食はせねば食はであり。一人隠れ居るばかりの屏風・几帳、着る物ばかりは、さは言へど、広かりし所の名残りに、なくなりぬと見れど、なほしつらひてあり。父ぬし、ものの器用あり、心憎き所ありし人なれば、家の様をかしよう面白かりし所なれば、池広く、植木面白く、草の様・気色など、なべてならず面白き所にて、夏になるままに、出で入り繕ふ人なき所なれば、蓬・葎さへ生ひ凝りて、人目まれにて、ただ明け暮れ眺むるに、秋にもなりぬれば、木草の色殊になりゆくを見るままに、言ふ方なく悲しくて、かく言ふ。

① わび人は月日の数ぞ知られける

明け暮れ一人空を眺めて（俊蔭娘）

など、独りごちてなむ眺めける。（二三〜二四頁）

①は、その前の地の文で綴られた「眺め」がちな状況をだめ押しのように繰り返し「一人」であることを強調しつつ、自分を「わび人」と観照する。また、

奈良へまかりける時に、荒れたる家に女の琴ひきけるを聞きて、よみて入れたりける

良岑宗貞

わび人の住むべき宿と見るなへに

歎き加はる琴の音ぞする

（『古今集』雑下・九八五）

や『大和物語』百七十三段など、遍昭の世界とかかわりが深い。

また、独詠歌と物語の視点からは、独詠歌が物語に固有のものであり、物語の冒頭に偏在する不遇の述懐の独詠が、「貧しくわびしい環境にある者を主人公とする、昔話に似た物語の型」であり、①と、仲忠とともに杉のうつほに至る際の⑩「涙川淵瀬も知らぬ緑子をしるべと頼む我や何なり」という俊蔭娘の和歌だけが「自己の不遇を確認するかのよう」に、目的もなく詠み出されている⁽⁵⁾。性格のものであること、登場人物を次に展開する物語の主要人物として読者に印象づける機能があること⁽⁶⁾等の指摘もあり、首肯される。

この場面を、大胡太郎⁽⁷⁾は「場面の語りが一人の人物の内面を具現化するためだけに費やされ、和歌を生んだ歌物語的方法」であるとし、渡辺泰宏⁽⁸⁾は「歌物語的な表現を持つ箇所」「歌物語の型」であるという。このように、散文で描かれた状況をうけて和歌が登場人物の内面を表

現する、すなわち、登場人物の思いが和歌に収斂する、このようなタイプのものを、歌物語の型の一つと考える。

類似の例として、『伊勢物語』には、和歌を書き置いて去った女を思う男が呆然とする、次の場面がある。

思ふかひなき世なりけり年月を

あだに契りてわれや住まひし

(二十一 段)

三 俊蔭娘・若小君の出会いと後朝

— 和歌が物語の展開に資するもの

第二場面 俊蔭娘・若小君の出会いと後朝

かくて、八月中の十日ばかりに、時の太政大臣、御願ありて、賀茂に詣で給ひけるを(中略)この家の垣穂より、いとめでたく色清なる尾花、折れ返り招く。前に立ち給へる人、「あやししく招く所かな」とて、

② 吹く風の招くなるべし花薄

我呼ぶ人の袖と見つるは(若小君兄)

とて渡りたまふ。若小君、

③ 見る人の招くなるらむ花薄

わが袖ぞとは言はぬものから(若小君)

とて立ち寄り給ひて、折り給ふに、この女の見ゆ。「あやししく、めでたき人かな。心細げなる住まひするかな」

と見給ふに、うち歩み入る後ろ手こともなし。若小君、「あはれ」と見給へど、一人行く道にしあらねば、しひて過ぎ給ひぬ。

かくて、御社に詣で着き給ひて、神樂奉り給ふに、若小君、「昼見えつる人、何ならむ。いかで見む」と思し、暗く帰り給ふに、人に立ち遅れて、皆人渡り果てぬるに、若小君、かの家の、秋の空静かなるに、見巡りて見給へば、野ら・藪のごと恐ろしげなるものから、心ありし人の、急ぐことなく、心に入れて作りし所なれば、木立より始めて、水の流れたる様、草木の姿など、をかしく見所あり。蓬・葎の中より、秋の花はつかに咲き出でて、池広きに、月面白く映れり。恐ろしきことおぼえず、面白き所を分け入りて見給ふ。秋風・河原風交じりて早く、叢に虫の声乱れて聞こゆ。月、隈なうあはれなり。人の声、聞こえず。かかる所に住むらむ人を思ひやりて、独り言に、

④ 虫だにもあまた声せぬ浅茅生に

一人住むらむ人をこそ思へ(若小君)

とて、深き草を分け入り給ひて、屋のもとに立ち寄り給へれど、人も見えず、ただ薄のみ、いと面白くて招く、隈なう見ゆれば、なほ近く寄り給ふ。

東面の格子一間上げて、琴をみそかに弾く人あり。立ち寄り給へば、入りぬ。「飽かなくにまだきも月の」な

どのたまひて、簀子の端に居給ひて、「かかる住まひし給ふは、誰ぞ。名告りし給へ」などのたまへど、いらへもせず。内暗なれば、入りにし方も見えず。月やうやう入りて、

⑤ 立ち寄ると見る見る月の入りぬれば

影を頼みし人ぞわびしき (若小君)
また、

⑥ 入りぬれば影も残らぬ山の端に

宿惑はして嘆く旅人 (若小君)

などのたまひて、かの人の入りにし方に入れば、塗籠あり。そこに居て、物のたまへど、をさをさいらへもせず。若小君、「あな恐ろし。音し給へ」とのたまふ。「おぼろけにては、かく参り来なむや」などのたまへば、けはひなつかしう、童にもあれば、少し侮らはしくやおおぼえけむ、

⑦ 蜻蛉のあるかなきかにほのめきて

あるはあるとも思はざらなむ (俊蔭娘)

と、ほのかに言ふ声、いみじうをかしう聞こゆ。いとど思ひまさりて、

(中略)

⑧ あき風の吹くをも嘆く浅茅生に

今はとかれむ折をこそ思へ (俊蔭娘)

と、ほのかに言へば、ふたしへに、いとほしく、あはれ

なることを思ひ入りて、

⑨ 「葉末こそあきをも知らめ根を深み

それ道芝のいつか忘れむ (若小君)

あが仏、疎かなるに、な思しそ。さりとも、かくてやむべきにもあらず。ただ慎ましきほどばかりぞ」とのたまひて、起きて出で給ふに、なほいみじう悲しう思さるれば、単衣の袖を顔に押し当てて、とばかり泣き入りて、かくのたまふ。

⑩ 宿思ふ我出づるだにあるものを

涙さへなるとまらざるらむ (若小君)

とのたまへば、女、うち泣きて、

⑪ 見る人も名残りありげも見えぬ世を

何と偲ぶる涙なるらむ (俊蔭娘)

と言ふ様も、いと心苦しけれど、殿のこともいとほしければ、返す返す契り置きて出で給ふに、殿の内をだに、人あまたしてこそ歩き給へ、ただ一所帰り給ふに、いづれの道とも知り給はぬうちに、あはれなる人を見捨てつるに、あれか人にもあらぬ心地して、見巡らして、辻に立ち給へり。
(二四〜二九頁)

父の賀茂詣でに従う途中、風に揺れる尾花を見た若小君が、帰途一人で俊蔭娘の住む屋敷を訪れる場面であり、男が零落した女に出会う物語の型に則っている。

若小君の④は「独りごと」とあり、独詠歌のかたちになっているが、「かかる所に住むらむ人を思ひやりて」とあるように、他者がいることが前提であり、自らの内面を表現するというより、伝達の機能を持つ歌に近いものとなっている。『大和物語』百七十三段では、女が和歌を「独りごと」のであるが、それを聞いた少将宗貞が和歌を詠みかけて話が進展することが思い合わされる。

続く⑤⑥が、『伊勢物語』八十二段にもある業平の「飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げて入れずもあらなむ」(『古今集』雑上・八八四)を下敷きになっていることは明らかである。自らを「影を頼みし人」「宿惑はして嘆く旅人」とし、塗籠に隠れた俊蔭娘に辛さを訴える。対する俊蔭娘の心内は「けはひなつかしう、童にもあれば、少し侮らはしくやおぼえけむ」と推量表現で語られて、拒否の表明ではあるものの、⑦と答えることになる。その声を聞いた若小君が「いとと思ひまさりて」、女が誰でどうしてこのような暮らしをしているのか尋ねて二人の距離が縮まっていき、一夜をともに過ごすことになる。

逢瀬の後、俊蔭娘は⑧で、この後二人の仲が絶えることへの不安を訴え、若小君は⑨で、浅茅生の「葉末」に俊蔭の娘、「道芝」に自分をたとえ、浅茅生の「葉末」を、根の深い「道芝」と対比しつつ、ここへ通ってくる道を

忘れないと、愛を誓う。

さらに、⑩で「娘の宿に心を残して私が出て行くというのに、涙までどうして留まらないのだろう」(「學術」、それを聞いた俊蔭の娘は⑪で、「あなたは名残惜しそうでもなく帰って行くのに、私はなんだってこんなにあなたをお慕いする涙が流れるのでしょうか」(「校注」)。⑧と⑨、⑩と⑪はそれぞれ、「秋」「涙」という贈歌のキーワードが共通し、和歌の贈答が成り立っていると見られる。また、⑧の後には「言へば」、⑩の後には「のたまへば」で続き、⑪の後には「と言ふ様も、いと心苦しけれど返す返す契り置きて出で給ふ」と、和歌を口にしたことやその時の様子が相手の心を動かす。

つまり、第二場面では、和歌を伴う会話が相手の感情を動かし、行動を促すという意味で、和歌が物語の展開に資するものとなっている。このようなタイプのものもまた、歌物語の型の一つである。

四 若小君帰宅、会えない日々が続く

— 解釈上の問題点

第三場面 若小君帰宅、会えない日々が続く

大殿には、昨夜、「かく、若小君おはしませず」とて

(中略)

かくて、かの女君、夢のごとありしに、ただならずなりにけり。それをも知らず、父母のみ恋しく、馴らはぬ住まひのわびしくおぼつかなきこと語らひ置き給ひし言を、草木の色変はり、木の葉の散り果つるままに、涙を落とし、眺めわたる。夕暮れに、稲光りのするを見て、

⑫ 稲妻の影をもよそに見るものを
何に譬へむわが思ふ人（俊蔭娘）

など言へど、誰かは答へむ。

若小君、かくて思ひ嘆く夕暮れに、風激しく、虫の声乱るるを聞きて、「あはれ、わが見し所の河原風、いかならむ」と思ひやりて、

⑬ 風吹けば声振り立つる虫の音に

我も荒れたる宿をこそ思へ（若小君）

など眺め居たるほどに、十月ばかりになりぬ。時雨る空にも、人知れぬ袖によそへられて、「眺むるをだに」と、空にのみ向かへるに、鶴、いとあはれに、うち鳴きて渡る。この君、これを聞きて、まして悲しさまざりて、

⑭ 「鶴が音にいとども落つる涙かな
同じ河辺の人を見しかば（若小君）

あはれ」と独りごちて、「いかならむ世に、今一度見む」と思へど、夢の通ひ路だになし。月日の経るままに、会ふ期なき音のみ泣かれまざりて。

かの京極にも、風の荒く、霜・雪の降り積むままに、

長き夜に、よろづのことを思ひ明かして、袖の凍れるを見て、

⑮ わが袖の解けぬ水を見る時ぞ
むすびし人もありと知らるる（俊蔭娘）

など思ふほどに、年返りて、春になりぬ。かの若小君、出で給ふとて、押し折り給ひし桂の木の萌え出でたるを見て、

⑯ 忘れじと契りし枝は萌えにけり

頼めし人ぞこの芽ならまし（俊蔭娘）

と思ひわたる。（二九〜三二頁）

若小君が行方不明になったため、兄の兵衛佐をはじめ昨夜若小君とともにいた御供の人々は若小君の父、大殿（太政大臣）に責められて、若小君を捜し回っていた。その間の事情はおもに会話文によつて語られる。無事発見された若小君は、予想通りこの後自由に出かけることが叶わなくなってしまう。俊蔭の娘は妊娠するが、自覚していない。このような事情が散文で記された後、⑬⑭⑯の五首の和歌が集中して記される。

⑫は難解な和歌である。「稲妻」は一般に、秋の田の穂の上を照らす稲妻の

光の間にも我や忘るる（古今集「恋一・五四八」）

秋の田の穂の上を照らす

稲妻の光の間にも君ぞ恋ひしき

稲妻の光の間にも忘れじと

言ひしは人のことにぞありける

〔古今六帖〕一・稲妻・八一三・八一四

のように、ごく短い時間の比喩として用いられるものだった。

そして、「よそに見る」は「よそながら見る。よそ事のように見る。関心もなく見る。」(『日本国語大辞典』)の意である。つまり、「あの瞬間の稲妻の光でさえもよそながら見る事ができるのに」(『新全集』)と、見ることができるとの対比を述べるといふよりも、「他人事として見る」「自分には無関係なものとして捉える」という表現であるように思われる。

次に、この和歌と類似する表現を周辺で探してみると、まず『おうふう』など諸注があげる、次の和歌がある。源順を『うつほ物語』の作者とする説もあり、ほぼ同時代のものである。

世の中を何に譬へむといふ古言を上置きてあまたよみはべりける

世の中を何に譬へむ秋の田をほのかに照らす宵の稲妻

〔後拾遺集〕雑三・一〇一三・源順

「世の中を何かに譬えるところ」という上の句の問いへの答えとしてあげられているのが下の句の「稲妻」で

ある。このように、『能宣集』の十一首など、「世の中を何に譬へむ」という表現は、ほとんどが上の句に置かれている。

一方で、「何に譬へむ」が五句目に置かれている和歌もある。

みちのくにの將軍のくだるに、むまのはなむけし
てぬさなど給ふに、歌よみてと人のこひしかば
塩竈のうらのしらなみよそにして

たつらんことを何に譬へむ (『能宣集』三三七)

ここで、「何に譬えようか」と疑問形のかたちで詠嘆する内容は、「陸奥の將軍が(なんと)私が知らないうちに出立する」ことである。

宮より、露おきたる唐絹まぬらせよ、経の表紙に
せむ、と召したるに、結びつけたる
置くくと見し露もありけりはかなくて

消えにし人を何に譬へむ (『和泉式部集』四七五)

も、はかないはずの露でさえも消えずにあるのだった、それでは露が消えるように亡くなってしまった人のことは、何に譬えたらよいというのだろうか、と詠嘆の思いを示している。その長さに違いはあるが、いずれも、表現すべき言葉が見つからないほどショックな出来事の上に置いて、それを「何に譬えようか、(譬えるものが見つからない)」と、詠嘆を示している。「何に譬へむ」

がどこに置かれていても「しを何に譬へむ」の「しを」譬えようとするのが示されているわけである。

しかし、⑫では、二句目に「現在または過去の事実に対する不満や後悔の念などが含まれているため、現代語の『のに』に相当する」（小学館『日本国語大辞典』）とされる「ものを」が使われている。つまり、この和歌には「しを」に当たる部分はなく、上句と下句の内容にはやや乖離があるのであって、『新全集』のように「まったくお姿を見せてくだらない私の愛するお方は、一体何にたとえたらよいのでしょうか」と四句目の「何に譬へむ」と五句目の「わが思ふ人」を倒置とみるのは自明ではない。

以上のことを勘案して第五句を呼びかけと捉え、「しを」の部分に「世の中」を補い、「（一瞬の比喩である）稲妻だって（私には）関係ないものとして見るというのに、（一瞬だって会うことのない私たちの仲は）一体何に譬えたらよいのだろうか。私の思う人よ。」という試訳を提示しておく。

和歌の前に「父母のみ恋しく」とあったことを重視するならば、この「わが思ふ人」は、父母ということになりそうだが、「我が思ふ人」が父母を指すとは考えにくい。若小君に呼びかける体で詠んだが、「たれかは答へむ」、すなわち、誰も答えなかったということであろう。

⑭の「同じ河辺の人を見しかば」という表現は、「あの鶴と同じ河原のあたりの女君と契ったので。」（『學術』『新全集』）などと解釈されることがあるが、『うつほ物語』「内侍のかみ」で、朱雀帝が、尚侍とした俊蔭の娘に対し「長生殿の長き人の契り」を引き合いに出して詠んだ、

姫松の鶴の千歳は変はるとも

同じ河辺の水と流れむ

（四三三ページ）

という和歌を参考に、「将来を約す人と出会ったので」と解しておく。そのほうが、『いかならむ世に、今一度見む』と思へど」との続きも良いからである。

⑯も難解な歌だが、諸注が指摘するように、以前に桂の木に関する記述はなかったものの、「木の芽」の「木」に「来」をかけて、頼みに思わせた人、若小君の来訪を願う歌とみておく。

以上、第三場面の和歌について、問題になりそうな箇所を中心に試訳を提示した。

五 若小君帰宅、会えない日々が続く

― 相対していない者同士のと歌が照応するもの

次に、この場面の和歌と散文の特徴について考える。

第一に、いわゆる「独詠歌」が多い。⑫～⑯の和歌に

は、「誰かは答へむ」「眺め居たる」「独りこちて」「思ふ」「思ひわたる」などの表現が添えられていて、詠んだ和歌が相手に届かないばかりか、互いの状況を知り得ない中で詠まれたことが繰り返されている。このような和歌の掲出方法からすれば、これらは「独詠歌」であるとひとまづは言える。

しかし、篠原昭二が述べていたように、①⑦以外の六首（筆者注―④⑫⑬⑭⑮⑯）は、「会うこと難い恋人への想いを詠んだものであって、形こそ独詠であるが、物語における効果としては、相聞の歌として、贈答歌と変わらないのである」ということこそが、この場面の特徴である。

⑬の前の「かくて思ひ嘆く」の部分には、「異所同時性」(『校注])、「俊蔭の娘が思い嘆くの意。若小君と俊蔭女が、別の場所で同時にということ」(『おうふう])という指摘がなされ、さらに室城秀之は、

物語は、俊蔭の娘の歌に続いて、「誰かは答へむ。」と語りながら、あたかもその歌に答えるかのように、若小君に独詠歌を詠ませる。時を同じくして、離れた二人が、同時にそれぞれの思いを独詠歌で詠み合う。独詠歌が、癒すことのできない孤独な心の表現から、惹かれ合う者たちの心の表現となって、これまでにない役割を果たす。

と述べている。

前節に述べたように、⑫と⑬は、俊蔭娘と若小君が互いに逢瀬を思い出しているという内容であり、物語の中で呼応している。⑭と⑮、あるいは、⑬⑭と⑮⑯に表現の一致はないが、「かの京極にも」と、若小君と対照させるかたちで俊蔭娘を引き出し、若小君と俊蔭娘が涙に暮れていることが描かれ、将来を約したことが⑭「同じ河辺の人」、⑯「頼めし人」と表現されている。

野口元大は、これらの独詠歌が「形式化」していて、「苦しみながら新しい表現の方途を求めて摸索するといった趣ではな」と評した。たしかに、どこまでいっても平行線をたどり、相手に届かず、和歌が相手の行動を促すことも、物語の展開に直接結びついていくこともない和歌が並んでいるわけだが、室城秀之が、あて宮求婚歌群の歌が、「それぞれ、異なる時間、異なる状況で、ほかの求婚者と相互に何の関連もなく詠まれたことになってい」るのにもかわらず、「それぞれの歌のことばが微妙に響き合いながら」「一つの歌群を作っている」と指摘していたことと共通する、『うつほ物語』の「模索」と言えるのではないだろうか。

その試みは必ずしも完成度の高いものではなかったかもしれないが、独り言としての、相対していない者同士の和歌を照応させることで、二人の思いは共通しながら

も生きる世界が交わっていかない状況を描こうとしたものと考えたい。

六 「若小君物語」の特徴

以上、「若小君物語」について、独詠歌に主人公の思いが収斂するもの、対詠歌が物語の展開に資するもの、相対していない者同士の和歌が物語の構成のなかで関連付けられ、照応しながら、その思いはとどかないまま時間の経過が示されるもの、という三つのタイプの「歌物語」の型を見てきた。

しかし、和歌と散文とのかかわりに関して、もう一つ重要な特徴がある。それは、散文の中に「あはれ」という言葉（ここでは、形容動詞、感動詞を区別しない）が多用されていることである。引用した三つの場面の中にも太字で示したように八例の「あはれ」という言葉が見えるが、第二場面で省略した⑦と⑧の和歌の間の部分には六例、第三場面の⑫の和歌の前の省略部分には三例あり、「若小君物語」全体では、十七例もの「あはれ」という表現がある。

この中には、第一場面の「いとあはれに悲しく」のように、中立的な語り手の立場からのもの、また、中立的であるかどうか判定しにくいもあるが、ほとんどは若小

君から、俊蔭娘への発話や俊蔭娘を思う文脈の中で使われている。

「若小君物語」は、長編の中に抒情的な場面を取り入れようとして、「歌物語」や抒情のありかを示す和歌というものを多用したのであろうが、それでもなお、散文で「あはれ」であることを執拗に語り続ける。この物語の創作者にとつて、読者に「あはれ」な物語であると了解してもらうためにはこのような念押しが必要であったと見るべきであろう。

※『うつほ物語』の引用は室城秀之『うつほ物語 全 改訂版』

（おうふう、二〇〇一年）、『伊勢物語』は石田穰二『新版 伊勢物語』（角川ソフィア文庫、一九七九年）、歌集は『新編国歌大観』（日本文学 Web 図書館）による。ただし、私に改変した箇所がある。また、『うつほ物語』中の和歌には通し番号と詠者名を付した。

【注釈書略称】

『角川』……原田芳起『宇津保物語 上』角川書店、一九六九年／『校注』……野口元大『校注古典叢書 うつほ物語(1)』明治書院、一九六九年／『學術』……上坂信男・神作光一『宇津保物語 俊蔭』講談社学術文庫、一九九八年／『新全集』……中野幸一『新編日本古典文学全集 うつほ物語①』小学館、一九九九年。（『角川』は浜田本、それ以外は前田家本が底本。）

注

(1) 「若小君物語」の部分が成立論の視点から「今宇津保」呼ばれることや高藤説話を基にしていると考えられることについては、小西甚一「俊蔭巻私見」(『国語国文』一九五四年一月)、小山敦子「うつほ俊蔭巻に現はれる語彙の性格」(宇津保物語研究会編『宇津保物語新論』古典文庫、一九五八年)、野口元大「うつほ物語の研究」(『俊蔭』の成立)(笠間書院、一九七六年)等に論じられており、大井田晴彦「長編物語の誕生——俊蔭』の成立と構想——」(『うつほ物語の世界』風間書房、二〇〇二年)は、父弥益が存命で生まれる子が女兒である高藤説話と異なり、両親はすでになく、生まれる子は仲忠という男児と、それを組み替え、零落した女と出会うという物語の型の発想を呼び込むことで成立したと整理している。

また、唐代小説「任氏伝」や屏風歌とのかかわりについては、高橋亨『物語と絵の遠近法』「絵と物語の想像力——宇津保物語の型と表現」(ペリかん社、一九九一年、初出、一九八三年)等がある。

村尾誠一「『うつほ物語』の和歌」(『うつほ物語大事典』勉誠出版、二〇一三年)は、和歌が「物語の想像力を現実の貴族生活の世界に、しっかりと結んでゆく役割を果たしている」箇所であることを述べ、独詠歌が「若小君

物語」に集中していることについては、後藤祥子「独詠歌論」(『国文目白』七、一九六八年三月)、久保木壽子「『うつほ物語』の和歌と散文」(『うつほ物語大事典』勉誠出版、二〇一三年)等に指摘されている。

(2) 三田村雅子「若小君物語の位相——宇津保物語における文脈コンテキストの差異と統合」(『玉藻』二二、一九八五年二月)、高野英夫「実忠物語の方法——『菊の宴』の巻を軸にして——」(『中古文学論攷』一三、一九九二年二月)、本宮洋幸「古歌が拓く歌物語的世界——『うつほ物語』『菊の宴』巻、志賀の山もと——」(『物語における和歌とは何か』武蔵野書院、二〇二〇年)。

(3) ジャンルとしての「歌物語」については近年、中野幸一「物語文学の諸相と展開」(『古代物語の系譜と類別——物語史の検証——』(勉誠出版、二〇二一年、初出、二〇〇五年)が以下のように提唱している。

古代物語の系譜自体も、従来の文学史のように「作り物語」と対比すべきは「歌物語」ではなく、「事実物語」であるべきこと、「歌物語」は「事実物語」の中の一類として位置付けるべきであること、「事実物語」に含まれる諸類も、さらに内容的性格から細分類が可能であること、しかしながら個性豊かな現存作品は、いずれも内容的性格が多様であるので、細分類した場合の一類には収まりきれないこと、現存作品の中で「歌物語」の類に

入るべき作品は、『伊勢物語』『平中物語』『篁物語』『多武峯少将物語』の四作品で、『大和物語』は「歌物語」と認められないこと、家集の中にも、『一条撰政御集』『伊勢集』『本院侍従集』のように、その一部に「歌物語」と認められる部分が存在すること

本稿も現時点での見通しとしてこの見解に賛同したいが、「事実物語」の中の諸類が多様な性格を持つと同様、「作り物語」である『うつほ物語』にも、多様な性格が含まれていると考えている。

『うつほ物語』の「歌物語」的なるものについて論じたものには、大胡太郎『うつほ物語』における歌物語的方法』（『琉球大学法文学部紀要 国文学論集』三六、一九九四年三月）、渡辺泰宏『うつほ物語』の表現位相―歌物語との関連から―』（『うつほ物語大事典』勉誠出版、二〇一三年）がある。

(4) 中嶋尚『平安中期物語文学研究』二「俊蔭」巻典拠小考―笠間書院、一九九六年、初出、一九九九年）

(5) 篠原昭二「物語歌と物語の型と源氏物語」(『国文白百合』創刊号、一九七〇年三月)

(6) 網谷厚子『平安朝文学の構造と解釈―竹取・うつほ・栄花―』(『うつほ物語の和歌・独詠の構造』(教育出版セシター、一九九二年、初出、一九八四年)

(7) (3) 大胡太郎前掲論。

(8) (3) 渡辺泰宏前掲論。

(9) (5) 篠原昭二前掲論。

(10) 室城秀之「前期物語と和歌―竹取物語からうつほ物語へ」(『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇七年)

(11) 野口元大(1) 前掲書。

(12) 室城秀之『うつほ物語の表現と論理』(『あて宮求婚譚と求婚歌群』(若草書房、一九九六年、初出、一九八五年)

[付記]

本稿は、二〇二二年一月二日の尾道市立大学日本文学会大会(第十三回おのみち文学三昧・オンライン)における口頭発表『うつほ物語』(『若小君物語』の歌と物語)にもとづく。ご教示を賜った皆様に厚く御礼申し上げます。

―みやたに・さとみ 日本文学教授―